

未熟児センター内保育に家族が早期に関与 することの親子・家族関係に及ぼす影響

山本 勇志 (福井県立病院)
春木 伸一 (")
荒川 朱実 (")
橋本 幸子 (")
渡辺 嗟恵子 (仁愛女子短大)

昭和53年以来、我々は隔離保育が当然とされた未熟児保育室に、早期に家族を導入し保育にかかわらせることで、Klausのmaternal-infant bondingを確保しようと試みてきた。

前報において、まずそのデメリットについて検討した。

- 1) ナースに負担のかかることは明白であった。
- 2) 室内汚染増加については
 - イ) 室内落下細菌数
 - ロ) インクベーター内細菌数
 - ハ) 児鼻咽頭菌

等を指標として検索し、入室時手洗い、ガウンテクニックを正確に指導すれば、汚染の増加はみられない。

3) 導入による収容児の感染合併症の頻度の検討により、導入以後に増加がみられない。

以上によりこの試みが進めうるものであることを証明した。

メリットとして

1) ナースの印象 生後1週以内から母親または家族が毎日または少なくとも隔日に来院し、保育にかかわることのできたグループ(以下導入群と記す)と、以上の条件を満すことのできなかった平均週1回の来院であったグループ(以下非導入群と記す)とを比較したとき、導入群が退院時の児の受け入れが格段に優れているということであった。

2) 退院後のアフターケアの不十分さに関係すると考えられる再入院の頻度について調べたが、導入群には再入院が殆んどないという結果を得た。この結果に励まされて、導入をすすめる一方、導入群の母親の受け入れの良さを客観的に確めるため、質問紙法と面接法により検討を行った。質問

紙は母親の行為を愛情軸X(受け入れ-拒否)、教育軸Y(支配-服従)に投影させて分析していく、Symondsの考え方を利用して、我々福井県の育児指導に関心を持つグループで作製した。

今年度の我々の課題は

- I. 福井県の母親の育児態度の標準像の追求。
 - II. 未熟児センター退院児の予後の調査と導入、非導入両グループの母親の育児態度の比較。
- という二つの面をもつことになった。以下その結果について述べる。

I. 福井県の母親の育児態度の標準像の追求。

前報の質問紙、幼児用と乳児用を用い無記名で回答を求めた。幼児用は1.5才～6才を対象とし、前回は調査の地域を重点に、保育園、幼稚園、教育委員会の協力を得て、総数1937名、内有効数1880名を得た。乳児用は6カ月～1.5才を対象として、県下9保健所の保健婦の協力により乳児検診の場で調査を行い、865名の回答を得た。地域は図1の如く、県下全域をカバーしている。今回は第2項の比較の対照として必要な、幼児の資料について検討し、概要を発表する。乳児用は次年度の予定である。(この整理は福井県立病院のコンピューターを用いて行った。)

A 調査項目

質問紙には、母親の育児態度に関する質問の他に基礎的な調査項目が添えてある。表1の如くで、対象集団の実態を明らかにし、また各条件が母親の育児態度に、どのように影響するかを検討することを目的としたものである。その一部について述べることにする。

イ. 対象の児の年齢構成 1才2.1%, 2才7.7%, 3才23.8%, 4才39.4%, 5才22.1%, 6才4.4%であった。

ロ. 性別 男52.0%, 女46.7%, 無記入1.3%
ハ. 母の年令 30才~34才52.1%が多く、次に25才~29才33.7%であった。

ニ. 遊び場所「十分」が28.6%, 「不十分だがある」が53.5%で、「ない」が16.2%であった。都市1人当り公園面積, 人口10万当り児童公園数共に日本一の福井県において、遊び場がないと答える親が16%あるということは気になる数字で、実態について調査したい所である。

ホ. 家族構成 祖父母同居家庭54.8%, 核家庭41.2%であり、1980年全国核家族63.4%に比べると、今回の対象児は祖父母同居が多く母親の育児態度にどのような影響を与えているか興味がある。

ヘ. 栄養 母乳ゼロで全人工乳が25.6%あり、厚生省資料の全国平均19.3%と比して多く、勤労婦人の多い福井県のある一面を示しているものと思える。

B 育児態度の分析

イ. 全母親の態度の平均

1880名の母親の育児態度の総平均を座標軸上に表わすと、 $X(-1.95)$, $Y(+3.11)$ であった。(図2) 予備調査(昭和55年)及び第一回調査(昭和56年)の結果と同じく、きびしさCrueltyの方向に偏位している。このことは問題を作製した我々10数人のメンバーの期待した母親像と現実とはかなりずれており、福井県の母親全体としては、より支配的で拒否的な姿を示しているのだということを考えさせる。これは他県、他地域で調査を行い比較してみたい所である。また同一質問に対する反応は、児の年令によって変るのは当然であるので、年令別に平均値をプロットしてみると、表2及び図2の如く、1才($X+3.6$, $Y+0.7$) 2才($X+1.5$, $Y+0.9$) 3才($X+0$, $Y+3.1$) 4才($X-2.4$, $Y+3.8$) 5才($X-4.4$, $Y+3.0$) 6才($X-5.3$, $Y+3.0$)で、年令の上昇につれてX軸上に受け入れから拒否の方向に順次移動しており、この差は1~2才では推計学的に有意でなかったが、2~3才, 3~4才, 4~5才で夫々 $P<0.01$ で有意であった。この分布で1才, 2才で受け入れ側に偏り, 3才で原点に近く, 4才, 5才, 6才で拒否に偏っているのは当然で、問題がかなり適

当であったかと考えられると同時に、この質問紙を利用して、母親1人1人の育児態度について判断する時は、児の年令基準をふまえて行う必要のあることを示している。Y軸に関して全般に(+)の方向に偏位して、我々の期待より支配的な傾向を示し、3才, 4才で特に顕著である。

ロ. Ambivalence

母親の育児態度の総合的な評価と共に、一人の母親が受け入れの的であると同時に拒否的であり、支配的であると同時に服従的であるという可能性はあり得る。母親の育児態度の根底が不安定で動揺することを示し、育児効果において警戒すべき因子である。SymondsはこれをAmbivalence(以下a. b. vと記す)と呼んでいる。我々は「きびしさ」の得点a($X-Y+$)と「甘やかし」の得点b($X+, Y-$)、「干渉」の得点c($X+, Y+$)、放任の得点d($X-, Y-$)において、 $a+b$ を横軸に、 $c+d$ を縦軸にとり、その親のデーターを座標軸上の点として表わした。原点より遠い程、a. b. vが大ききことを示している。全体の平均をみると、a. b. vは横軸で13.3、縦軸で12.2を示した。

ハ. 各項目の育児態度に及ぼす影響
興味ある2, 3の項目をあげるに留める。

①核家族と祖父母同居家族

表3に示す如く核家族の母親の方が、祖父母同居群よりもきびしい傾向にあり、その差はX軸、Y軸共に $P<0.01$ で有意であった。これに反してa. b. vは祖父母同居群が大きく、その差はa+d軸共に $P<0.01$ で有意であった。祖父母の溺愛的な傾向に対して、むしろきびしく児に対しながら、しかも受け入れと拒否の間に動揺する同居家族のむずかしさの表われかも知れない。

②母の仕事

勤めを持つ母親群と家事群を比較すると、表4の如く後者がより支配的で、この差は $P<0.01$ で有意であった。a. b. vでは勤め群の方がa-b方向に大きく、その差は $P<0.01$ で有意であった。家庭に留る主婦が支配的になるのは、時間と余裕があって、生き甲斐を子供を支配することに求めるのか、或いは視野の狭さを示すものなのか、また子供に接する時間が少ない勤める母親が、きびしさと甘やかしの間にはっきりと動揺を示し

ているのも興味もあるし、うなづける気もする。婦人の就業率日本一の福井県では、この問題は更に他の要素と関連させて検討する必要があると考えている。

③遊び友達

「たくさん」と「ない」の二群を比較すると、表5の如く(X-2.76, Y+3.49)と(X-0.75, Y+1.67)で、前者の方が拒否的で支配的で、この差はX軸、Y軸共に $P < 0.01$ で有意である。仲間と共に遊んでいる環境の中で、母親がより支配的になるのは、他の子と比べて自分の子の発達への過大な期待であろうか。これに反して、a. b. vでは「ない」群の方が干渉-放任の間で大きく、その差は $P < 0.05$ で有意である。仲間の中の我子のみをみる方が安定しているのであろうか。この調査のすべての項目に関しては、渡辺がまとめて仁愛女子短大紀要に一部発表し(13巻51頁)一部は投稿中である。

Ⅱ 未熟児センター退院児の予後調査

A 対象と方法

昭和41年9月1日～56年6月30日の間にセンターに収容された未熟児の内406名に対して調査用紙を郵送し、未着48、有効数358名中221名(61%)より返信があり、その内の59%131名が来院し面接をうけた。41%90名は質問紙による判断である。

面接調査は当院小児科心理相談室で、心理判定員荒川が一人で全員に行った。面接の手続きは3才～6才の場合、まず母子を検査用机に案内し、名前や年令など簡単な話しかけのあと田中ビネー式知能検査を行った。年少で導入困難な場合にはプレールームで遊んでから導入した。1名の視力障害児を除いて全員に施行できた。1才～2才の場合、プレールームで津守式乳幼児分析的発達検査を行った。一部の2才児には知能検査が施行できた。これらの検査の終了後、プレールームで子どもを遊ばせながら母親と面接し、特に児に対する態度について観察した。全所要時間は平均一時間余であった。

B 結果

イ) 面接児の年令と在胎週数、出生時体重

表6に示すごとく年令の幼い者ほど面接を希望

しており、又、面接群131名の平均在胎日数は34W、平均出生時体重は1878gで、非面接群90名の平均36W、2100gと比較すると、出生時の条件が悪く期間の短かいもの程面接を希望していることが判る。

ロ) 発達について

1才～2才の平均DQ値及び2才～6才の平均IQ値を示したものが表7である。1才児のDQは95、2才児のDQは93とやや低めであるが、2才以上の平均IQはいずれも100以上であった。個人別で問題になる遅れを示したのは視力障害を伴った一例のみであった。

ハ) 生育歴と母の思い

調査用紙の生育歴より、初笑、頸定、おすわり、ハイハイ、ねがえり、一人立ち、初歩、初語について平均年令を求めた。之を非面接群及び一般幼稚園児(正常児と記す)と比較したものが表8である。正常児群に比べて未熟児群に遅れがみられ、未熟児の中では面接群が非面接群に比べて遅れており、面接を希望した親の不安の裏付けになっていると思える。

その母の思いを比較したのが表9である。正常児に比べて面接群が圧倒的に遅れに対する不安が強くなり、之に反して非面接群は正常児群と変らなかつた。面接によって確かめ得た不安の中で一番多かったのは言葉の遅れであった。

C 質問紙法による育児態度の比較

未熟児群の母の育児態度の総合評価を年令別に正常児群と比較したのが図3である。未熟児群を年令別に展開して例数が少なくなったので有意差の検定は行わなかったが、1才～4才の未熟児群が正常児群に比して、X軸上で(+)即ち受け入れ側にあることを認めた。5才～6才になると正常児群と差が認められなくなる点から、子どもの遅れに応じて受け入れめであるのかということも考えられる。が一方、生育歴では初歩、初語までの遅れは認められるが、より不利な出生条件を示し不安の強かった面接群においてすら2才以上のIQは平均100以上であったことを考えると、この不安は実態を伴わないもののように考えられる。未熟児で生まれたということが子に接する態度を受け入れめにするのであろうか。

D 導入群と非導入群の比較

面接調査を行った131名中4才までの導入群は29名、非導入群は78名であった。その平均在胎週数と出生時体重を比較したものが表10であり、導入がriskの大きい症例においてすゝめられてきた一面をうかがわせる。2才までの平均DQは導入群が僅かに低い。2才以上のIQの平均は差が殆どない。

イ) 質問紙法による育児態度の比較

表11に示す如く、導入群($X+5.7$, $Y+3.1$)非導入群($X+2.3$, $Y+2.6$)、正常児群(1才~4才)($X-1.02$, $Y+3.15$)で、導入群が非導入群に比べて格段にX軸上に(+)即ち受け入れのであった。abvに関しては大きな差は認められなかった。導入群の対象児が非導入群の対象児よりも生下時条件がより劣悪であることを考慮に入れるとこの結果をそのまま受け入れることができるか問題がある。しかし、我々の当初の印象を裏切らない結果をみることができた。今後導入を拡大してゆく上でこの方法を用いて更に多くの症例について確かめるつもりである。

ロ) 面接者の主観による母の育児態度

判定員荒川は面接に際して、導入グループか非導入グループであるかを予め知ることなく観察を行った。相談内容や心理相談室内における母の子に対する態度を、きびしすぎ、甘やかしすぎ、干渉しすぎ、放任及びふつとと区別した。その傾向の著明なものを導入群、非導入群に分けたものが表12であり、導入群は未だ5才以上がないため、非導入群を1才~4才と5才~6才に分けた。導入、非導入いずれの群にも甘やかしすぎの者が多いが、導入群にはきびしすぎや干渉しすぎの者が非導入群より少ない傾向がみられる。養育態度がふつとでかたよりが少ないと思われた者は60~70%で、導入群にやや多い傾向がみられた。導入群は出生時にriskの大きい症例が多い割にかたよりが少ない傾向がうかがえ、母子関係の円滑な成立に導入の効果が働いているとも推測される。又、5才~6才にはきびしすぎる傾向の者が多かったが、導入をとり入れる前後の差か、年令

的なものか今後検討すべきと思われる。

以上、我々は未熟児センターを退院した児の子後調査を行い、面接及び質問紙法により、導入群の母親が非導入群の母親よりもより受け入れの的であるという結果を得ることができた。

尚この項の詳細は荒川がまとめて発表する予定である。

結 論

前報につづき、I 母親の育児態度の調査、II センター退院児の子後調査による早期保育導入群と非導入群の比較を行った。

I 全県下に亘る1880名の幼児の母親を対象に質問紙法による調査を行い、a. 育児態度の平均は $X(-1.95)$ 、 $Y(+3.1)$ と「きびしさ」に偏った値を得た。之を年令別に展開した所、X軸上で1才、2才は(+)即ち受け入れに、3才は原点に、4、5、6才は(-)即ち拒否の方向に順次に分布することを認めた。Y軸に関しては全年令に支配的傾向を認めた。b. ambivalence について、きびしさ-甘やかし、干渉-放任の両方向にかなり大きな値を認めた。現時点に於ける母親の動揺が大きい事を感じた。

II. 385人の退院児中221名の返信を得131人の面接を行った。a. 母の不安は生下時条件の劣悪な程大きかったが、2才以後の平均では知能の遅れはなかった。b. 質問紙による育児態度は導入群の方がより受け入れのであった。c. 面接者の主観による観察では、導入群が非導入群より偏りのない育児態度を示しており、円滑な母子関係の成立を感じさせた。以上、早期保育導入は母子関係によい影響を及ぼすと結論を得た。

今後の課題

1. 本調査の結果を地域に還元し、育児指導に役立てる。
2. 乳児の資料を整理する。
3. 導入を促進し、例数を増やしていくことが必要と考えられる。

表1. 調査項目

- | | |
|--------------|---------------|
| 1. 家族構成 | 11. 妊娠出産時の異常 |
| 2. 兄弟姉妹と出生順位 | 12. お産はどうでしたか |
| 3. 母の年齢 | 13. 体重と仮死 |
| 4. 母の仕事 | 14. 一人歩きと発語 |
| 5. 母の学歴 | 15. 子どもの発達 |
| 6. 住居 | 16. 栄養 |
| 7. 遊び場所 | 17. 0歳児の世話 |
| 8. 遊び友だち | 18. 集団生活 |
| 9. 子の年齢 | 19. しつけのくいちがい |
| 10. 性別 | |

表2. 子の年齢

	数	%	X	Y	A+B	C+D
1歳児	40	2.1	3.63	0.73	12.96	11.33
2歳児	146	7.8	1.52	0.92	14.45	12.55
3歳児	448	23.8	0.01	3.06	14.07	12.66
4歳児	741	39.4	2.6	3.78	13.17	12.17
5歳児	416	22.1	-4.35	2.97	12.64	11.75
6歳児	83	4.4	-5.30	2.99	12.27	12.19
無記入	6	0.4	-3.67	4.33	12.33	13.33
TOTAL	1880	100	-1.95	3.11	13.31	12.21

表3. 家族構成

	数	%	X	Y	A+B	C+D
核	774	41.2	-2.61	3.47	12.71	11.84
同居	1032	54.9	-1.43	2.87	13.73	12.43
無記入	72	3.9	-2.33	2.58	13.85	12.99
TOTAL	1880	100	-1.95	3.11	13.31	12.21

表4. 母の仕事

	数	%	X	Y	A+B	C+D
自 営	241	12.8	-1.85	2.98	13.30	12.39
勤 め	725	38.6	-1.62	2.32	13.58	12.12
パート家事	580	30.9	-2.02	4.16	12.98	12.15
そ の 他	50	2.6	-4.84	3.68	12.78	11.90
無 記 入	284	15.1	-2.25	2.98	13.41	12.46
TOTAL	1880	100.0	-1.95	3.11	13.31	12.21

表5. 遊び友だち

	数	%	X	Y	A+B	C+D
た く さ ん	493	26.2	-2.76	3.49	13.34	11.79
少 し	1162	61.8	-1.80	3.19	13.35	12.31
な い	201	10.7	-0.75	1.67	13.05	12.58
無 記 入	24	1.3	-2.96	3.63	13.13	12.92
TOTAL	1880	100	-1.95	3.11	13.31	12.21

表6.

	1才	2才	3才	4才	5才	6才	計
面 接 児	29人	23	19	28	18	14	131
非 面 接 児	12	15	24	22	14	3	90
計	41	38	43	50	32	17	221

表7.

	1才	2才		2才	3才	4才	5才	6才
	N=29	N=15		N=8	N=19	N=28	N=17	N=14
DQ平均	95	93	I Q平均	115	110	103	110	109
男	92(16)	93(7)	男	114(2)	109(11)	104(18)	112(7)	109(8)
女	98(13)	94(8)	女	116(6)	112(8)	102(10)	109(10)	109(6)

表8.

		初 笑	首の すわり	お 座 り	ハイ ハイ	ね が えり	一 人 立 ち	初 歩	初 語
未 熟 児	面 接 児	3.0 _M	3.7	7.2	9.3	6.9	11.0	14.2	13.1
	非面接児	2.7	3.5	7.1	8.7	6.3	10.6	13.4	12.7
	全未熟児	2.9	3.6	7.2	9.1	6.7	10.8	13.9	12.9
正 常 児		2.6	3.1	6.2	8.0	5.5	9.9	13.3	12.2

表9.

		順 調 で たのしみ	少し不安 がある	遅れてい ないかと ても心配	無 記 入	合 計
未 熟 児	面 接 児	N=45 34%	N=39 30	N=26 20	N=21 16	N=131 100
	非面接児	N=61 68	N=19 21	N=2 2	N=3 9	N=90 100
	全未熟児	N=106 48	N=58 26	N=28 13	N=29 13	N=221 100
正 常 児		N=1274 68	N=379 20	N=49 3	N=178 9	N=1880 100

表10.

	人数	在胎週数 平均	出生児体重 平均	I Q 平均	D Q 平均
導 入	29人	32 W	1505g	109	88
非導入	78	36	2028	112	97

表 11.

		X	Y	a+b	c+d
未 熟 児	導 入	5.7	3.1	14.3	12.3
	非導入	2.3	2.6	12.9	12.1
正 常 児		-1.02	3.15	13.6	12.3

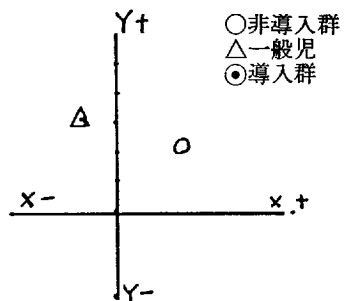


表 12.

		きびしすぎ	甘やかし すぎ	干渉し すぎ	放任	ふつう	合 計
導 入		N=2 7%	N=5 17	N=1 3.5	N=1 3.5	N=20 68	N=29 100
非 導 入	1-4才	N=7 10	N=13 18	N=5 7	N=2 3	N=44 62	N=71 100
	5, 6才	N=13 42	N=0 0	N=1 3	N=0 0	N=17 55	N=31 100

図 1

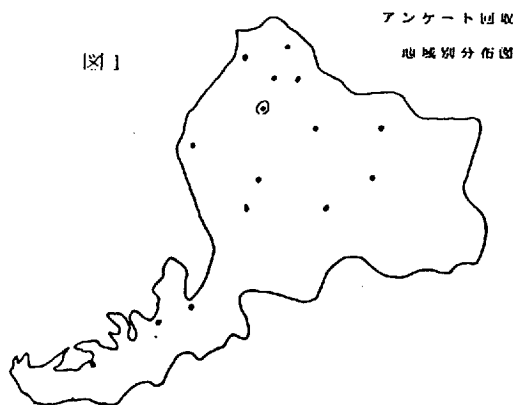


図2 一般児の平均

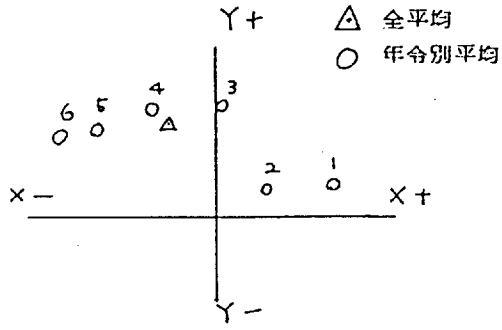
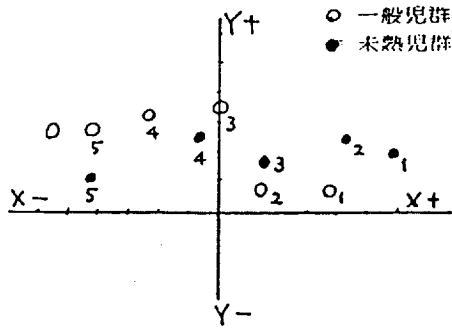
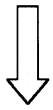


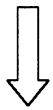
図3 一般児と未熟児





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



結論

前報につづき、母親の育児態度の調査、センター退院児の予後調査による早期保育導入群と非導入群の比較を行った。

全県下に亘る 1880 名の幼児の母親を対象に質問紙法による調査を行い、a. 育児態度の平均は $X(-1.95)$, $Y(+3.1)$ と「きびしさ」に偏った値を得た。之を年令別に展開した所、 X 軸上で 1 才, 2 才は (+) 即ち受け入れに, 3 才は原点に, 4, 5, 6 才は (-) 即ち拒否の方向に順次に分布することを認めた。 Y 軸に関しては全年令に支配的傾向を認めた。b. ambivalence について, きびしさ - 甘やかし, 干渉 - 放任の両方向にかなり大きな値を認めた。現時点に於ける母親の動揺が大きい事を感じた。

. 385 人の退院児中 221 名の返信を得 131 人の面接を行った。a. 母の不安は生下時条件の劣悪な程大きかったが, 2 才以後の平均では知能の遅れはなかった。b. 質問紙による育児態度は導入群の方がより受け入れ的であった。c. 面接者の主観による観察では, 導入群が非導入群より偏りのない育児態度を示しており, 円滑な母子関係の成立を感じさせた。以上, 早期保育導入は母子関係によい影響を及ぼすとの結論を得た。